

〔研究ノート〕

「四国八十八ヶ所（1）」

The eighty-eight temples of shikoku island (1)

黒木 賢一

KUROKI, Kenichi

「大阪経大論集」 第63巻第4号 抜刷
Osaka Keidai Ronshū Vol. 63, No. 4 November 2012
2012年11月 大阪経大学会発行
Edited by Osaka University of Economics Institute

〔研究ノート〕

「四国八十八ヶ所（1）」

黒木 賢一

I はじめに

四国遍路とは、徳島県の第一番札所^{りょうぜんじ}霊山寺から、高知県、愛媛県を経て、香川県の第八十八番札所大窪寺に至る八十八ヶ所をめぐる、全行程1200kmの巡礼である。大窪寺を打ち終えると霊山寺に再び戻り「循環の巡拝」を終える。その後、お礼参りとして高野山奥の院に参詣するのが決まりになっている。四国四県をつなぐ遍路道は、密教の「胎藏界曼荼羅」で説かれている「四転説」による仏道修行の四つの道場として位置づけられ、東の徳島県は「発心」、南の高知県は「修行」、西の愛媛県は「菩提」、北の香川県は「涅槃」の道場として呼ばれている。徳島県の「発心の道場」では結願を目指し「十善戒」を実践しながら歩く。札所での作法や般若心経を読経することに次第に慣れ、発心の思いを強く抱く。高知県の「修行の道場」では、太平洋の荒々しい海辺の道をただただひたすら歩くという修行であり「歩く行」の意味に気づかされる。愛媛県の「菩提の道場」では、温暖な瀬戸内海の風景が遍路者の心をなごませ歩きに余裕が出てくる。香川県の「涅槃の道場」では、結願に近づくがゆえにすべてのことに感謝の念が湧いてくる。この仏道修行の四つの道場に点在する八十八ヶ所の各札所には、それぞれの歴史が刻まれている。

四国霊場八十八ヶ所の形成については、元禄3年（1690）に真念が刊行した『四国徧礼功德記』に、「いづれの時、たれの人という事さだかならず」と記述している（伊予史談会、1981）。元禄の頃でさえ、八十八ヶ所の霊場がいつ誰によって定められたかが分からないのである。しかし、真念は弘法大師の弟子である真済^{しんぜい}（800～860）が大師の入定後に遍礼したことから始まったのではないかと推測している（伊予史談会、1981、浅井、2004）。また、真念は四国に名所旧跡が多い中で札所を八十八と定めた話として次のように述べている。それは仏陀が^{した}つきつめた「四諦」（苦諦、集諦、滅諦、道諦）の真理によれば、苦の原因は煩惱の中にあるという「集諦」があり、我執や世間体による「見惑」という煩惱がある。この煩惱は八十八^し使があり、この数をとって八十八ヶ所と定め、これを巡礼することで煩惱を断滅するによる数であるのではないかという。現代の研究においても、「現行の八十八ヶ所がさだめられたのはいついかなる経過においてなのか、さらには八十八という数そのものが何故選ばれたのか、等々の問題に対しても同時にこたえなければならぬはずであろうし、それについては今のところ何ひとつあきらかにしえない状況にある」（真野、1980）という。四国遍路は弘法大師のゆかりの地を巡る「聖地巡礼」である

といわれているが、歴史的に四国霊場は多様な信仰が複合しており、多層的に発展し形成されていると多くの研究者が認めている。前田（1970）によれば、四国八十八ヶ所の霊場のうち、現在でも天台宗が四ヶ寺、臨済宗が二ヶ寺、曹洞宗が一ヶ寺、時宗が一ヶ寺あり、かつては40番札所観自在寺は天台宗、49番札所浄土寺は浄土宗、51番札所石手寺は法相宗、四県に一ヶ寺ある国分寺は華嚴宗であったという。また四国八十八ヶ所の札所の多くは真言宗の札所であり、古来から四国遍路を歩くのは真言僧が多く、高野聖などは行商をかねて盛んに遍路をしたがゆえに、四国遍路は弘法大師のゆかりの地をめぐる巡礼として形成されたという。四国遍路は真言宗の開祖である「空海」と宗派を超えた伝説上の「お大師さん」に支えられた聖地であるがゆえに、宗派にとらわれず四国の地に多くの遍路者が赴くのではないだろうか。本稿では八十八ヶ所の各札所についての歴史や言い伝えなどについて、徳島県（阿波）の23ヶ寺について述べる。今後、高知県以降の札所について随時論文としてまとめる予定である。

II 徳島県（阿波）の23ヶ寺

遍路の旅は鳴門から西に延びている撫養街道（現在の県道12号）が最も便利なルートとして古くから発達していた。現在は、明石海峡大橋を渡り淡路島へ、そして大鳴門橋を通り四国へ入るルートが一般的だ。図1の徳島（阿波）の23ヶ寺の地図を参照してほしい。この撫養街道沿いはお遍路の足慣らしである「十里十ヶ所（1番札所霊山寺から10番札所切幡寺）」が並んでいる。吉野川を北岸から南岸に渡り、第11番札所藤井寺から阿波一番の難所が「遍路転がし」と呼ばれ内陸部に入った第12番札所の焼山寺へ至る道がある。焼山寺からは山を下り平野部へ、第13番札所大日寺から第17番札所井戸寺までは札所が集まっ

（図1）徳島県（阿波）の23ヶ寺



『太陽 特集四国八十八ヶ所遍路の旅』より

(写真1) 霊山寺の仁王門



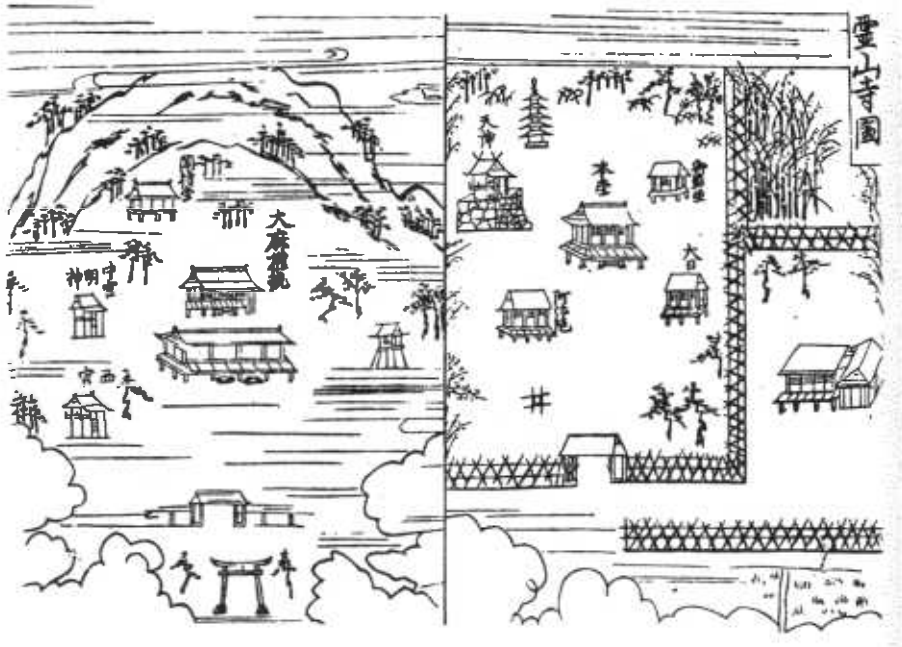
ている。徳島の市街地を通り、第18番札所恩山寺と第19番札所立江寺を打つと山に向かって歩く。第20番札所鶴林寺と第21番札所の太龍寺は山頂にあり、阿波の三大難所の「遍路ころがし」といわれている。山頂から第22番札所平等寺へ下り、第23番札所薬王寺へ向かうと視界が広がり、海が見えてくる。

神戸から第1番札所の霊山寺に行くには、筆者は神戸三ノ宮から高速バスに乗り、明石海峡大橋を渡り淡路島を南下し、鳴門大橋を渡り四国に入る。高松自動車道の鳴門パーキングで下車して、10分ほど歩けば霊山寺に着く。写真1の霊山寺の仁王門をくぐると、正面奥に本堂が見え、左手には鐘楼と多宝塔があり、右手には美しい鯉が泳ぐ泉水池が印象的だ。本堂前では不動明王など十三仏が遍路者を迎えてくれる。寺は聖武天皇（在位724～479）の勅願寺として行基（668～749）¹⁾が開いた。御詠歌は「霊山の釈迦の御前に巡り来てよろずの罪も消え失せにけり」とうたわれている。弘仁6年（815）に弘法大師がこの寺で21日間の修法を行っているとき、釈迦如来がインド（天竺）の鷲峯山で説法している姿をイメージし、釈迦如来の姿を刻んで本尊にしたと言われている。天竺の霊山を和国に移すという意味で、山号を竺和山、寺号を霊山寺として、四国霊場の第一番札所に定めたのである。人々の幸せを願い四国霊場の開設を思い立ったといわれている。

図2の寂本の『四国遍礼霊場記』によれば、本堂、大日堂、大師堂、阿弥陀堂、天神が配置されている。また奥の院として大麻比古神社を隣に載せている。大麻比神社（阿波一宮）は、霊山寺の裏山麓（阿讃山脈）に位置しており大麻山の中腹にある。寺の奥の院が神社であることが不思議に思われるかもしれないが、明治維新政府の神仏分離政策以前は

1) 行基 奈良時代の僧。朝廷からは度々弾圧を受けたが、民衆の強い支持を背景に活動した。聖武天皇に拔擢され奈良大仏の建立の責任者に抜擢された。東大寺の「四聖」の一人である。

(図2) 霊山寺図 (『四国遍礼霊場記』)



神仏習合が残っていたからである。八十八ヶ所の札所には必ず奥の院がある。奥の院とは霊場の発祥地を示しており、寺社においては神仏が祀られているのは、山頂や岩窟などの場所であり、開創の根本を規定し、札所とは別格の威厳を備えた聖地のことを意味している(中山, 2004)。

五来(2009)によると、霊山寺が1番札所になったのは、信仰上の問題ではなく、本土より四国に渡るのは鳴門市の商業港の撫養が最も便利であり、その一直線上に達することが出来るという交通上の利点からと、阿讃山脈の南麓には十ヶ寺の札所が集まっており1日で巡拝できることも1番にした理由ではないかと述べている。

霊山寺は遍路を始める人と遍路を結願した人が出会う札所である。本堂の横にある売店で巡拝用品(白衣・白ズボン・輪袈裟・菅笠・金剛杖・納経帳・経本・納め札・小型鞆・ローソク・線香など)を購入する。そして、『四国遍路—作法とお経の意味—』の冊子をいただき、遍路の心得について教えを受ける。遍路の身支度をして、自分を鏡で映すと自分であって自分ではない不思議な感覚に陥る。霊山寺を出て歩き始めと、大海原に掘り出された気持ちになり、期待と不安が広がる。

第2番札所の極楽寺は霊山寺から1,4キロの距離で、民家を通り抜けたところに朱色の仁王門が現れる。手水場の近くにお大師さんが植えたと言われる樹齢約1200年の長命杉がそびえ立っている。42段の石段を上ると正面に本堂があり、右奥に大師堂がある。寺の開基は行基である。縁起²⁾では、弘法大師は21日間『阿弥陀経』を読誦し修法中に阿弥陀如来が現れ、その姿を刻み本尊にすると光を放ち海まで達したという。その光は、漁業のさま

たげになったので、本堂の前に小山を造り光りを遮ったことから、山号は「日照山」になったといわれている。

第3番札所金泉寺は極楽寺から2.6キロの距離で、朱塗りの仁王門をくぐり、境内の赤い欄干の太鼓橋を渡ると正面に本堂、大師堂は本堂の右手前にある。美しい多宝堂は天正10年（1582）に焼失しその後には再建されたという。行基が開基で、当時は金光明寺と呼ばれていた。また学問寺であり「経所坊」というところで講義が行われていた。後に、弘法大師が境内に湧く泉から黄金を見つけたことから金泉寺と改名したと伝わっている。御詠歌は「極楽のたからの池を思へただ、黄金の泉すみたたえたる」である。中山（2004）によると、御詠歌の内容は札所本尊の靈験を謳ったもの、巡礼の感動、功德、願意を詠んだもの、仏典の教理や寺社の縁起を解くものが多いがゆえに、仏に捧げる讃辞の歌であり、札所参拝の勤行の最後に歌う五七五七七の御詠歌という形式で仏を念じて死者の成仏を願うことは功德があると信じられたという。

第4番札所大日寺は、黒谷川上流の山の中に入ったところにあり黒谷寺とも呼ばれている。山沿いの道を抜けると朱塗りの山門がある。正面に大日如来を安置する本堂があり、右手には大師堂がある。開創年代は不詳。伝承によれば、弘法大師が当地で修法していた時に大日如来を感得し、その姿を刻んで本尊にした。江戸時代に万人講を組織して復興した寺だと言われている。この万人講とは、少額の寄付を多く人から集めることで、皆の功德を倍加させることである。寄付する人が一万人なら功德は一万だというのが万人講の考え方であり、共同体全体の所有であり、功德も分け合えるし維持をみんなできると考え出された（五来，2009）。この札所は、著名な四国大学の教授であり密教美術作家の真鍋俊照氏が住職をしている。

第5札所地藏寺の境内の中央に樹齢約八百年のイチョウの古木があり、それを中心に左手に本堂、右手に大師堂が配置されている。寺は弘仁12年（821）嵯峨天皇の勅願によって弘法大師が開創したとされる。その後、宇多天皇（在位887～97）の時代にこの寺の住職であった浄函が、熊野権現の神託によって刻んだ延命地藏菩薩の胎内に本尊の勝軍地藏菩薩を納めた。勝軍地藏は悪行煩惱の軍を斬るという仏のことであり、戦国時代に三好氏の保護を受け、武人の信仰をあつめた。また、この寺は「羅漢さん」で有名で「五百羅漢」で知られる奥の院がある。羅漢とは、釈迦の弟子で修行の末に悟りを開き、修行僧として最高位を得た僧のことである。

第6番札所安楽寺は山号を温泉山というように、昔から温泉が湧いているのを弘法大が見つけ、弘仁2年（811）に堂宇を築き、本尊の薬師如来を安置したのが寺の始まりと伝わっている。多くの歩き遍路者は第1番札所霊山寺から約17kmの地点でその日の宿をとることになる。江戸時代、この寺は藩主からお遍路に宿と食事を提供するよう指定され「駅路寺」の役を担っていたがゆえ、現在でも宿坊がありラジウム鉱泉の大きな風呂が完備されている。宿坊で泊まれば、朝のお勤めがありお遍路の旅が始まったのだと遍路者と

2) 縁起 神社仏閣の沿革や由緒、そこに現れる功德利益などの伝説のこと。

(写真2) 十楽寺の山門



しての自覚ができる。

第7番十楽寺は、中国風の朱塗りと白い漆喰の鮮やかな山門(写真2)が目に入る。山門を入ると100体ほどの水子地藏が並んでいる。石段を登ると正面奥に本堂、左手に大師堂があり、大師堂の登り口左手にある「治限疾目救歳地藏尊」は目病にご利益があるといわれている。開基は弘法大師で、この地で阿弥陀如来を感得し、その姿を刻み本尊とした。平安時代の高僧の源信(942~1017)は『往生要集』に極楽浄土には十の楽しみがあると記している。御詠歌は「人間の八苦を早く離れなば至らん方は九品十楽」。凡夫の四苦八苦を逃れ、光明輝く十の楽しみが得られるようにと山号は光明山寺号は十楽寺と定めた。平成19年に近代的なバリアフリーの宿坊ができ、歩き遍路にとっては6番と7番の札所に宿坊ができ宿の心配がなくなった。

第8番札所熊谷寺は田園の一本道に高さ13メートルの四国最大の山門がポツリと建っている。境内は山に向かって坂道を上り本堂へ、42段の階段を上ると大師堂に着く。石段の両端には多くの1円玉がおかれ、男性の厄除けのためだという。開基は弘法大師で、大師の修行中に熊野権現が現れ金の観音菩薩を置いて立ち去ったという。大師は千手観音像を刻み、その胎内に観音菩薩を納め、本尊にしたと言われている。御詠歌は「薪とり水熊谷の寺にきて難行するも後の世のため」である。その由来について五来(2009)は、この寺には「千部法華会」という儀式があり、山岳修行者が法華経を読んでいた形跡をもとに、法華経を実践すると迫害を受けるが、法華経の行者といわれる持経者がいたと『梁塵秘抄』をひもとき説明し、薪取りや水汲みは苦行の一環であったという。四国霊場は弘法大師信仰一色に見えるが、本来は日本の原始信仰や古代信仰が古層に眠っていることがこの御詠歌からも伺える(藤田, 1996)。

第9番札所法輪寺の周辺は水田が広がり、地元の人々は「田中の法輪さん」と呼んでいる。

（写真3）焼山寺山道への入り口



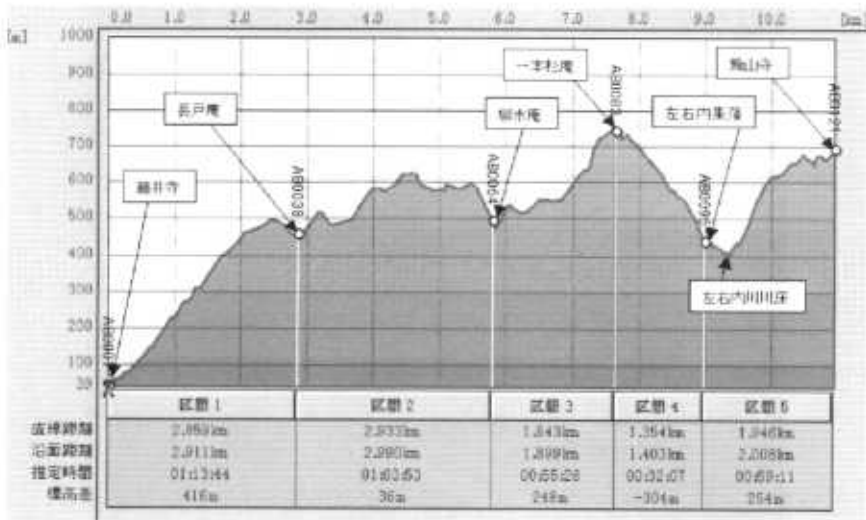
山門から石畳を歩くと本堂が、右手に大師堂があり、こちんまりと整った境内はこころをなごませる。弘法大師が像長80cmの釈迦如来の涅槃像を作って本尊にしたと言われている。「寝釈迦」を本尊にしているのは、八十八ヶ所の札所の中でこの寺だけでありめずらしい。

第10番札所切幡寺の山門をくぐると急勾配の333段の長い石段がある。終盤の33段の女厄除け坂と42段の男厄除け坂を上ると正面に本堂がある。寺が伝える縁起は、村に機織り娘がおり、立ち寄った弘法大師が繕いための布を求めたところ、娘は織っていた布を惜しげもなく切って差し出した。大師は千手観音菩薩を刻んで贈り、娘を得度させ、灌頂を受けさせると、娘が千手観音になったという。山号は「得度山」、寺号は「切幡寺」、院号は「灌頂院」である。

第11番札所藤井寺は、東西に流れる吉野川を北岸から南岸に渡り、鴨島町の山麓にある。小川沿いに小さな仁王門があり、石段をのぼり境内に入ると藤棚が目にはいる。堂内の天井に描かれた睨みを効かせた「雲龍」は必見である。縁起には開創は弘法大師で、三方を山で囲まれ溪流の清らかに地に、薬師如来を刻み、この像を本尊として、堂宇を建立した。寂本の『四国遍札霊場記』には「今は禅者棲息せり、これに依って今の堂其の宗の風に作れり」と記されており、この時代にはすでに禅宗の寺になっていたことが分かる。

第12番札所焼山寺へ行くには、藤井寺から12.5kmの「遍路転がし」と呼ばれる難所で山の起伏が激しく6時間ぐらいかけて辿り着く。図3を参照すれば山の高低差が分かる。標高約700メートルの山中にある焼山寺への道（写真3）は、歩き遍路のイニシエーションとしての場であると考えればよい。開基は修験道の開祖とされる役小角で、修行道場として開き、蔵王権現を祀ったことに始まる。伝説では、この地に毒龍が棲んでいて火を吹き、全山が火の海であった。これを弘法大師が水垢離をし、水輪の印（摩盧）を結び真言

(図3) 藤井寺から焼山寺への高低差



(「四国の道よ空よ海よ」より)

を誦すると火が消えたので毒龍の退治にでかけた。すると毒龍が大師に襲いかかったとき、虚空蔵菩薩が現れ毒龍を岩屋に閉じ込めたという。大師は虚空蔵菩薩の像を刻んで本尊として、山号は「摩廬山」、寺号は火の山にちなんで「焼山寺」としたといわれている。このように、各札所には弘法大師の超自然的な力に魅惑され、多くの不思議な現象を通して靈験譚が生まれたのである。現代にあっては、日常的にあり得ない常識を越えた不思議な物語は荒唐無稽のように思われるかもしれない。しかし、五来(2009)は、このような靈験譚の奥には歴史的事実がかくされていると言い以下のように説明している。当時、山の神秘性を守っている人たち(山人)がおり、「穢れた体で山に入ると山神が怒る」と言われていた。それは、山人とはシンボリックには山神=毒龍であり、山人が許すことができる精進潔斎と修行による能力を示し、山人を納得させねばならなかったからである。山人に対して密教行者が行力を示すことで、山人を従属させ、従者として食物を運ばせ食事係とした。それが三面大黒天であり厨(台所)の神のことであるという。

第13番札所大日寺は、焼山寺から平地に向けて下り、鮎喰川沿いに歩けば6時間ぐらいで着く。森の中にある一宮神社と県道をはさんだ向かい側に建っている。縁起によると、弘法大師が護摩修行をしていると、紫雲が舞い降りて大日如来が姿を現し、大日如来の像を刻み本尊にした。後に、一宮神社の別当寺になり一宮寺と呼ばれ、寺を境内に移し十一面観音を本尊といわれている。

第14番札所常楽寺は大日寺から鮎喰川を渡った田園地帯に建っている。50段の石段を登ると山門はなく、「流水岩の庭」と称される自然の大岩盤が波のように広がっており、本堂へと続く。写真4を見ると、ゴッゴッ岩の境内と本堂を覆うようにそびえ立つアララギの霊木が立っている。その木の股に置かれた石の大師像が置かれており親しみをこめて

（写真4）常楽寺の境内



「アララギ大師」と呼ばれている。弘仁6年（815）、弘法大師がこの地で修法をしている時、弥勒菩薩が現れ大師に説教をした。大師は霊木にその姿を刻み、堂宇を建立し安置したという。

第15番札所国分寺の風格のある山門を入ると正面に入母屋造りの本堂が建っている。天平13年（741）聖武天皇は諸国に命じ、天下太平を願う国分寺を全国に建てた中の一つである。開基は行基で天皇からの勅命を受けて堂宇を建立した。山門の近くに礎石が一つ置かれている。この礎石は、表面中央に円形の窪みがあり、当時の七重塔の基とされている。時代が変わり、『四国遍礼霊場記』には「小堂一宇薬師の像を安じ、一滄露の客僧、苔径の月を友とし、竹窓の風にひとり臥。嗚呼」と記されており、すでに小堂一宇しかなく薬師如来を清貧の客僧が一人寂しく守っているという当時の様子を描いている。奈良時代から時を経ることで、江戸初期の寺自体の栄枯盛衰を表している。本堂の右手前には大師堂と鳥枢沙摩明王堂がある。この明王は穢れを払い清浄する仏さまで、糞尿までも食べてしまうということで、禅宗では便所に祀られている。

第16番札所観音寺の山門は狭い道路を挟んで商店街に面している。山門をくぐると目の前に本堂がある小さな札所である。天平13年（741）に聖武天皇の勅願寺として創建された。弘仁13年（816）に、弘法大師が千手観音菩薩を彫り本尊としたと言われている。観音寺に伝わる霊験譚として、大正2年（1913）に盲目の遍路が開眼した、また明治27年（1894）邪悪な女が姑を火のついた薪で叩いて虐待をした報いとして、大やけどをしたという話が伝わっている。

第17番札所井戸寺の縁起の開創は、聖徳太子或いは弘法大師とも言われており、正式名は明照寺という。本尊の七仏薬師如来座像は聖徳太子、脇仏の日光・月光菩薩は行基の作であり弘法大師が十一面観音菩薩を刻み安置したといわれる。水不足で困っている村人を

(写真5) 恩山寺



見て、手にした錫杖で一夜のうちに井戸を掘ったところ精水が湧きだしたのが「面影の井戸」である。これにちなんで寺号を井戸寺にした。その井戸は本堂そばにある日限り大師堂の中にある。この井戸に自分の姿を映し出し、その姿を石で彫ったのが「水大師」で、日時を限って参拝すると願いが叶うという信仰から生まれたのが日限大師だ。水面に自分の姿が映るか否か井戸をのぞいてみてはどうだろうか。水神が井戸にいるという信仰から、水が信仰の対象になり、それが大師伝説に移行したのである（五来，2009）。

第18番札所恩山寺（写真5）は、井戸寺から徳島市内を通り約20キロの道のりである。寺は山の中腹にあり、山門をくぐり参道を登っていくと、石段の途中に大師堂と御母公堂が並んで建っており、登りきると本堂がある。山門の少し上には母の玉依御前たまよりごぜんの入山を記念して大師が植えた伝えるピランジュ（唐木）がある。本来、女人禁制で入山することができなが、大師は秘法を修して禁制を解き、母を迎え入れた。それゆえ、山名は母養山という。御詠歌は「子を生めるその父母の恩山寺 訪らひがたきことはあらしな」といい、父母の恩を思えば、この寺を訪れることは簡単なことであるという意味である。縁起は聖武天皇の勅願で行基が厄除けの薬師如来座像を刻んで本尊にしたと言われている。

第19番札所立江寺の周辺は、門前町となっており、静かな町並みに溶け込んで建っている。縁起では、聖武天皇の勅願寺で行基が光明皇后の安産を祈願して一寸八分（約5.5cm）の延命地藏を刻み、安置したといわれている。後に弘法大師が、本尊があまり小さいので紛失を恐れ、6尺（約1.8メートル）の地藏菩薩を刻んで胎内に納めたといわれている。この寺は八十八ヶ所に四箇所ある「関所寺」の一つである。関所寺とは邪心のあるものは必ず見破られて罪を受けるといふ寺のことをいう。これは心理的な関所のことを意味している。この寺では、悪女お京の「肉髪付きの鐘の緒」の話しが有名である。江戸時代後期、岩見みそかおの国（島根県）出身お京は、大坂の色町で男と出会い脱走して国で夫婦になったが、密夫

(図4) 太龍寺から鶴林寺への道



(「四国の道よ空よ海よ」より)

(愛人)をつくりその男と二人で夫を撲殺してしまう。二人でお遍路に出かけこの寺を訪れ、本堂で参拝したところお京の髪が逆立ち鐘の緒に絡みついた。いくらもがいても髪の毛が取れず、住職に自らの過ちを懺悔すると、鐘の緒に絡みついた黒髪を頭皮ごと切ることによって命は助かったという。このことを切っ掛けに二人は寺近くの土地に住み地藏菩薩を信仰したという。この黒髪は小さな「黒髪堂」に納められており、覗いて見ると、頭皮についた色あせた黒髪がひっそりと置かれていた。

第20番札所鶴林寺は標高570メートルの山頂にあり、第12番札所の焼山寺、第21番札所の太龍寺と並んで、阿波の三大難所、遍路ころがしの一つである。図4を参照すると険しい山道が続いているのが分かるだろう。山門には、運慶作と伝えられる仁王像の前に木彫りの鶴が立っている。山門を入り長い石段を登ると、左右に青銅製の二羽の鶴に守られた本堂がある。高さ3メートルの右の鶴は、羽を広げ天に向かって飛びたつような動的な姿であり、左の鶴はくちばしを閉じ静的な姿である。この二羽の動と静の鶴は陰陽そのものである。寺は弘法大師の開基とされ、大師が修行中に来山したとき、杉の古木の上に2匹の鶴がとまり、黄金の小さな地藏菩薩を守っているのを見たことに始まる。大師は新たに大きな地藏菩薩を刻みその胎内に納めて本尊としたといわれている。本尊の一本造りの地藏菩薩は、平安期の仏像で国の重要文化財に指定されている。この地藏菩薩には別名「矢負い地藏」を呼ばれている。一人の猟師が猪を射止め、その後を追っていくと地藏菩薩に矢が突き刺さっているのを見て、猟師は懺悔して地藏菩薩にお仕えたという。藤田(1996)によると、猟師が射かけた獲物を追うと仏であったという話は山岳霊場における話としてよくあり、山人の宗教者が仏教化するプロセスがこのような伝説に潜んでいるという。

(写真6) 薬王寺の厄除け石段



第21番札所太龍寺は標高618メートルの太龍寺山の山頂付近にあり、弘法大師24歳の作『三教指帰』の序文に、「阿国大竜嶽あこくだいりゅうのたけに躋のぼり攀よじ、土州室戸岬ごんねんに勤念す、谷響きを惜しまず、明星来影す」と述べている。阿波の大滝嶽によじ登り修行し、土佐の室戸岬で大声で念誦していると、御仏の靈応を感じることができたと言う意味である。若き日の弘法大師が、一人の沙門から授かった「虚空蔵求聞持法こくうざうぐもんじほう」を大滝嶽（舎心ヶ嶽）で行ったと言われている。虚空蔵求聞持法とは、虚空菩薩の真言を100万回唱えれば、すべてのことが暗記できるという密教の秘法である。この寺は桓武天皇の勅願により、弘法大師が開基した。本尊は虚空蔵菩薩で、寺号は修行中の大師を守護したという大きい龍にちなんでつけたという。境内にある詩仏堂の天井には龍の絵が生き生きと描かれており、一見する価値はある。

第22番札所平等寺の二王門には赤、黄、緑、紫、白色の五色の大きな幕が掛かっており、大師堂にも五色の幕が架かっている。弘法大師がこの地へやってくると五色の雲が現れ梵字が出現し、薬師如来の姿になったので、如来を刻んで堂宇をたてた。そのとき、水を得ようと地面を掘ると、乳のような水が湧き出た。これを「白水の井戸」という。この井戸は本堂石段の左側にあり、「弘法の水」と知られ万病に効くと言われている。

第23番札所薬王寺は徳島県最後の札所で、ウミガメの産卵地で知られる日和佐海岸の近くに位置している。神亀3年（726）聖武天皇の勅願によって行基が開基したと伝承されている。弘仁6年（815）弘法大師が42歳の時に厄除けを祈願して、薬師如来を刻んで本尊にしたと言われている。薬王寺は厄除けの寺として全国的にも名高い。女坂が33段、男坂が42段、真っ直ぐに伸びた石段には1円アルミ硬貨を置いて厄払いをする。写真6を見れば階段のすみに置かれている硬貨が分かる。このような祈願法は第10番札所切幡寺、第22番札所平等寺でも行われている。男坂を上りつめると正面に本堂、左手に大師堂がある。